

沖縄地域総合交通歴史研究*

——「古琉球」時代の交通——

A Historical Study on The Transportation of Okinawa Islands

— Summarized notes for the era ,so called ,OLD RYUKYUS —

上 間 清**

by Kiyoshi Uyema

Last year the author started a historical study on the transportation of Okinawa Area, the southern-most islands prefecture of Japan, and presented its fundamental consideration.

In this paper the author discusses historical phase on land and marine transportation, placing emphasis on the problems of so-called KO-RYUKYU-JIDAI or OLD RYUKYU ERA which is the second of five classified periods for the history-general for the area.

Along with transportation, the discussed includes the background picture of the era, some notes on main historical references with a era-related table, and others.

1. まえがき

本研究においては、前・第13回土木計画学研究において初回の発表を行い、研究の意図、範囲、研究史、時代区分等の考察を含めて対象域の交通史について全般的考察を提示した。¹⁾今回は沖縄交通史の5時代区分—原始・古琉球・近世・近代・現代—の第二区分である「古琉球」時代の交通について考察することを目的としている。この時代は沖縄地域の、固有の歴史や文化の形成にとって重要な時期であり、交通史考察上も国際交流を支えた海上交通の進展など特筆される事項がある。

2. 古琉球時代の特徴

沖縄県史の時代区分については、その政治、経済文化の発展段階の特徴から、日本史における武家支

配の中世に相当する内容が稀薄あるいは欠落している見解が一般である。古琉球時代は日本史一般との対応では中世の南北朝時代の中期から室町時代に相当する約260年間に対応する(表-1)。この時代は、14世紀中期における、域内の三つの小王国「三山」の対立時代が終息し、15世紀初頭に統一琉球王国が形成され、他国の支配のない自主独立国として経過した時期である。古琉球時代の終焉となる1609年は薩摩による干渉や支配が開始された画時代的な年であった。

古琉球時代の特徴を簡略に記述すれば次の通りである。

- ①群勇割拠の「三山時代」が清算され、奄美諸島から八重山諸島までを版図とする統一琉球王国が形成され発展した。
- ②中世期のわが国をはじめ、中国、朝鮮、東アジア諸国との交流を活発に行い、いわゆる海洋発展時代を形成した。
- ③今日、沖縄文化と称される文化諸相の性格を

* キーワーズ：沖縄地域、交通、古琉球時代

**正会員 工博 琉球大学教授 土木工学科
(〒903-01 西原町字千原1)

表-1 古琉球時代交通史—和・中・琉・他 対応年表

	○沖縄史	○日本史	○中国史	○其他	○交通関連事象 (古琉球時代関連)
1200	琉球先史時代	鎌倉時代	宗		琉球 ①王国の統一安定化のなかで本島中南北の各域内集落間、域間の道路網整備進展。
1300	琉球先史時代	鎌倉時代	元		②グスク建設のほか石橋、海中道石敷道など、陸路の建設にも石材が利用される。
1400	琉球先史時代	南北朝時代	明	東アジア諸国交流期	③交通搬具としては頭載、背負、肩載など単純なものが一般。支配層では馬背、輿、箆の利用概測。 ④サバニ、馬船など地舟による沿岸交通発達、陸路の不備を補う ⑤海上交通の発達に支えられて中国、東南アジア諸国、朝鮮との交流(冊封・貿易)盛行。いわゆる海洋発展時代を出現。
1500	琉球先史時代	室町時代	明		中世日本 ① 荘園制の下商品経済、問丸為替取引の発達などにより水運の飛躍的発達。統一政権の下では道路政策・建設、駅制など進展。
1600	琉球先史時代	室町時代	明		②先代の日唐交流の盛行、低調な日宋交流の後をうけた中世は日明交流が開始され、冊封・勘合100道”等を背景として盛行。
1700	琉球先史時代	室町時代	明		③中世日本の対外交流史の枠組の主要構成項目に、対中国、対朝鮮対東南アジアとともに、対琉球関係も重視されている。
1800	琉球先史時代	室町時代	明		西欧 ①ガレー船、発達航行。四角帆から三角帆船へ発達移行。
1900	琉球先史時代	室町時代	明		②15c前半、明代中国の提督ティフは当時世界最大級の船団でインド洋へ大航海を繰り返したという。 ③マゼラン、ドレーク、デ・ケイセラなど西洋の提督や探検家らが大航海を試み大航海時代を出現。 ④船舶技術、航行技術、航行支援施設など大航海時代を支える工学技術の発達も顕著。

海外の影響を受容しつつ形成、定着させた。

- ④王府その他による地域固有の記録なども現われ、沖縄の歴史時代の幕を開いた。

3. 「歴代宝案」について ²⁾

沖縄地域に関する古代の断片的な記録は、日本書紀に後者は琉球王府の編集による、AD1424年から1867年(明治時代開始前年)の間約440年間の外交記

あって史家の注目する所であるが、沖縄地域や琉球王国が明確となった記録が出始めるのは14世紀以降のことであり、今日、古典的と考えられている記録の主なものを図-1に示した。

これをみると、「おもろさうし」や「歴代宝案」が古琉球時代と深く関わっていることがわかる。特

録を集成（全270巻）したものであるといわれ、沖縄歴史研究にとって欠くことのできない基本文献とされるものである。このことは交通史研究、特に海上交通史にとっても同様であり、貴重な文献である。

たとへば次のような標題の記録がある。

○欽賞衣服等併賜海船一隻於福建撥与領（AD1434）の維持発展にとって、交通に関わる諸条件—交通網
○福建等处承宣布政使司為護送官員事（AD1959）の形成、搬具の製作や具備、交通技術、交通制度などこれらには、船舶の供与や修理のことなど種々の記録がある。その他、歴代宝案には船舶数、積載貨物、航海経路等多くの貴重な内容がある。

以上、沖縄の交通史研究上、欠くことの出来ない貴重な文献としての「歴代宝案」について略記なが

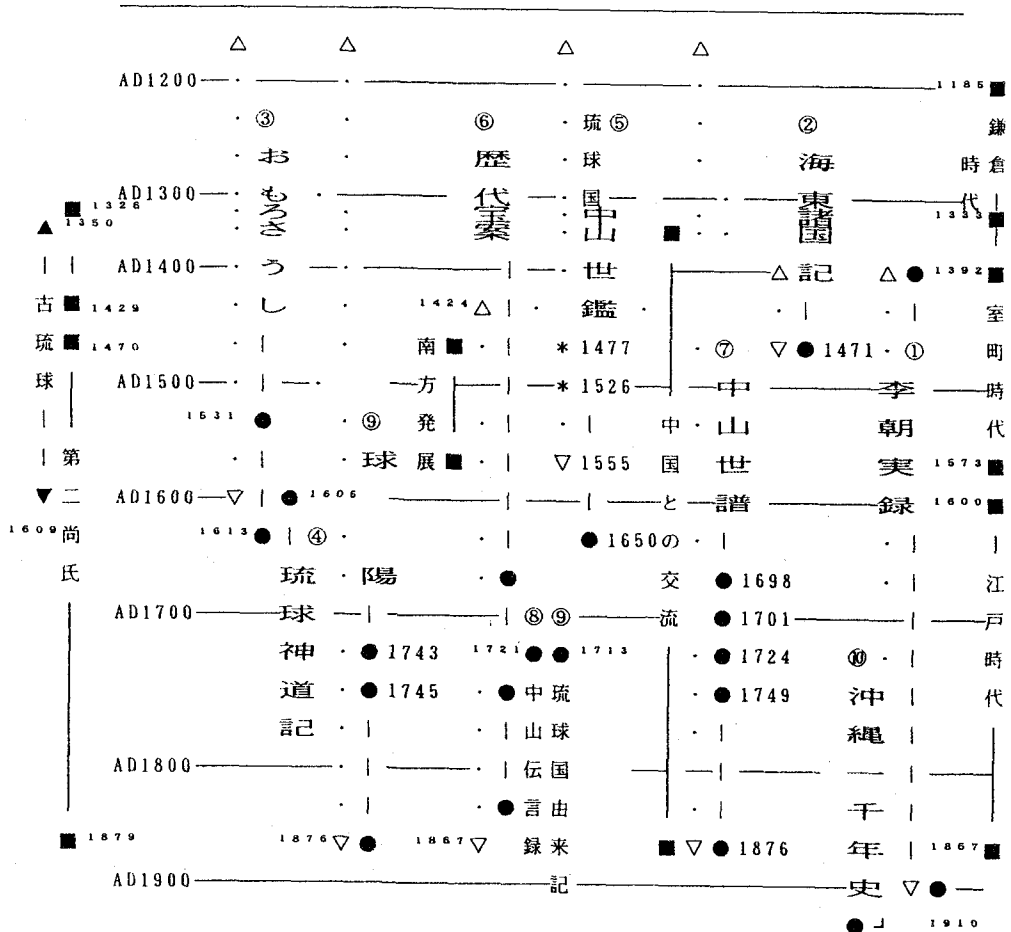
ら特筆しておきたい。

4. 古琉球時代の交通の概況と意義

古今、大小何れの国家においてもその形成と統一の整備充実がその重要な前提の一つであったことは周知の事実である。小王国琉球においてもこのことは、程度の差こそあれその歴史を考える際の基本的視点として維持してよいと考える。

さて、先に述べたように 沖縄地域の歴史時代が、

図-1 沖縄歴史研究「古典」的史料編集・著作成立・発行時期分布



①②などは文献番号、古→新の順。

(注) ●は文献の編集・成立などの時点。▽△の間は当文献

のカバーする範囲。■、▲、▼の間は各時代。＊は記述不在。

この時代から始まったとはいへ、この時代の陸上・海上交通について具体的に系統的に記述する史料は少ない。従って交通も含めて歴史の考察は、次の時代まで引き継がれる「おもろさうし」やその後の「歴代宝案」、「中山伝言録」また琉球王朝の正史とされる「中山世鑑」など、あるいは考古学的な成果を参考に考察・推定する方法に依存することとなる。

以下には筆者が調査した内容から主要なものを略記しておきたい。

陸上交通

- ①古琉球時代の道路網は、先史「グスク時代」に形成されたものを骨格として継承発展した。沖縄本島の北部に比較し王府所在地の南部においては格差的な進展があった。
- ②すなわち、王府首里を中心として港都・那覇および旧南山地方、また中城^{なかく}地方との間にはかなりの密度で道路網が発達した。
- ③道路は一般的に土質道であるが、恩納村仲泊遺跡に見られるような一部加工のある石を用いた道路も14世紀頃には造られたと考えられる。このことは、後のより精緻な石造構造物である石橋やグスク、墳墓などがあることから、その先駆としてかなり以前からの石の利用があったと考えられる。
- ④沖縄固有の信仰の定着化が進み、それを支える拝所を結ぶ道にも関心が払われ、今日に伝わる「東り御廻り」^{あがり うまーい} 「今帰仁上り」^{なきじん ぬふい} などの、いわゆる神の道の原形的なものが造られ始めたと考えられる。

海上交通

- ①「三山時代」から各王達は個別に中国などと交流を開始していたが、14世紀中庸、統一国家が出現し海外との交流はいよいよ拡大進展し15世紀中庸から16世紀中後期までいわゆる「海外発展時代」を招来した。中国とは中華思想に基ずく冊封・貿易関係を維持利益を享受した。朝鮮、東南アジア諸国とも交流を行い、貿易のほか大きな文化的影響を受けたとされる。(図-2)
- ②搬具としては沿岸海域においてサバニ(くり舟、後には板張り、独特の形状をもつ)や山原船^{やんばるしん}(馬艦船^{まかんしん})のような帆船が利用され陸上交通の不便を補ったと考えられる。
- ③既に述べた古琉球時代における海洋発展時

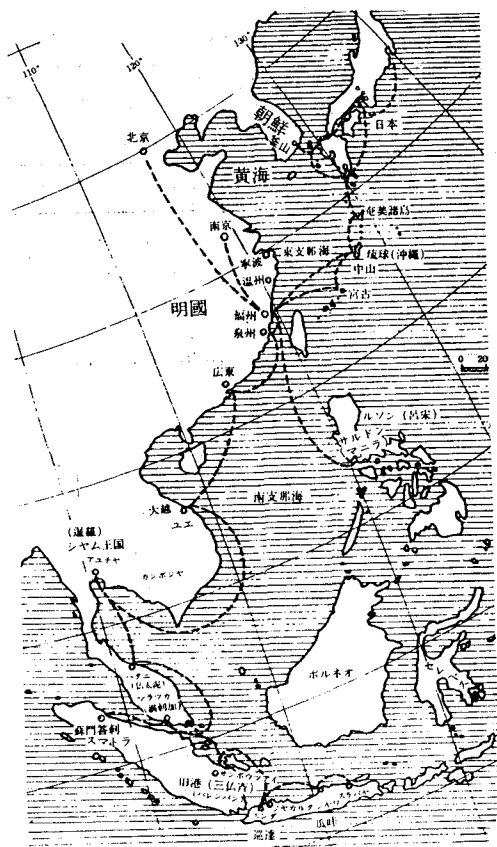


図-2 琉球王国の周辺国との交流状況
—「海外発展時代」(15~16世紀)—

代に用いられた船舶は、中国から与えられた、ジャンク船タイプのものであったであろう。勿論、帆船であるがその大きさの表現には「反帆」^{たんぱ}が用いられていたという。3~12反帆まで種々の大きさのものがあ

- り、時代とともに大型化したと思われる。
- ④中世日本との船舶による交通も、「おもろさうし」にみる「けうかまくら」(京鎌・倉)の頻出、その他北九州の商人を介しての朝鮮との交易の他文献の記録などあることから中継貿易の相手国としてかなり頻繁な関係があったといえよう。
- ⑤以上のように概観される古琉球時代の交通環境によって、周辺国から文物の移入、また職人など人物の来琉があり多くの文化的インパクトを受けた。これらと在来固有の

表-2 沖縄文化における海外の影響(例)

分野	状 況	証 拠	年 代	備 考
絵 画	二つの流れがあると考えられている。「第一に中国系、即ち宋、元、明の影響」いま一つは鎌倉、室町、桃山、江戸の流れである。	① 円覚寺の壁画「金剛会図」 冊封使陳保使録、同寺の上梁文 ② 尚真王以来の御後絵(肖像画)の存在	① 尚真15年(1492)頃 ② 明らかではないが、尚真の頃からこれらの絵画技法がかなりのレベルにあったもよう。	① 現存せず ② 作者、明らかなでない、表現、現方法に聖徳太子像に相通ずるものがあるという。 17C以降、中国や日本に留学、従来の宗教画に加えて臨真画も盛んとなり近代絵画導入。
彫 刻	初期の頃は中国の影響か。「ともあれ沖縄の文化は一言にしてはいえは種々の「様式」をとり入れて独自に消化し拘泥たる華を咲かせたといえよう」	石獅子(首里城瑞泉門、歓会門、靈法殿)、竜柱(首里城正殿前)、勾欄羽目の浮彫(世持橋、觀蓮橋、放生橋)、放生橋々柱の記録「梁能、陳義」	尚真王時代(1477-1526)その黄金時代を迎えた。	建築と併せてこれらの彫刻と石造構造物の特徴が伊東忠太や田辺泰らの往年の建築家の「中国気分」と称した中国風の印象を与えたものと思われる。
工 芸 一 般	沖縄の工芸は海外貿易を基礎にして発展をとげ、風土と環境が独自のものをつくりあげた。中国陶磁器の一つ「大らかさ」「廣揚さ」が影響を与えた。南方系、中国系、朝鮮系、大和系に区分される。これらの影響をうけ総体として多様である。	南方系-南蛮焼、談谷山花織、芭蕉布、耕 中国系-緞織、紅型、ラデン、堆錦 朝鮮系-瓦、施釉マカイ、把瓶花生 大和系-印籠、重箱	尚真王時代前後に多くの分野で工芸盛ん。 1609年以降、自らの生産体制をつくりあげ、王府の統制、指導のもと発展してきた。	沖縄工芸の特色は「たくましさ」「素朴さ」「おいらかさ」にある。
漆 器	14~5Cまでの漆芸は室町時代以来、中国から学び、日本の技法を学んだと思われる。後、海外から学びつつ、独自の発展をとげた。	① 1372年、中国と国交開始した際の貢品の中に「螺殼」がみえるという-最古の記録 ② 「球陽」(巻二)の記録から1427年頃、夜光貝の使用、日本から漆をとりよせていた。 ③ 「季朝実録」に1473年頃、漆器の利用の記録。	明確ではないが、15C後半頃までには、かなりの技術があり、陶器の利用も普及。	1612年、貝摺泰行所設置後は、技術者を海外(中国、日本)へ派遣し技術を習得させ発展した。 代表的技法に「螺鈿」「堆錦」などがある。
織 物	古代は日本の影響か。初期は大和系、織柄物が多い。耕は南方貿易以降と考えられている。	1477年与那国の織物の記録(季朝実録) 耕、花織物-南方系 浮織-ろう緞、紗織-中国系	明確な年代は全般的には不明 1500年頃絹織物技術導入	耕については、わが国の耕の源流をなすという。 沖縄→薩摩→久留米→中国地方→東北地方へ伝わる。

基層文化が融合し今日沖縄文化と称される文化諸相を形成定着させたといへよう。海外の影響について表-2³⁾を参照されたい。

5 古琉球交通史のスケルトン

これまで古琉球時代の交通の状況につき略述したが、目下記述を試みているその目次構成は次の通りであることを記しておきたい。

序説、I 古琉球時代の背景と特徴／1 沖縄史区分上の特徴／2 古琉球時代概観／3 比較史的考察
II 古琉球時代の交通-陸上／1 集落の発達と交通／2 首里を中心とした道路交通網／3 沖縄本島

の道路網／4 交通搬具／5 事例特記、Ⅲ 古琉球時代の交通－海上／1 中国との交流－実態と交通／2 東南アジアとの交流－実態と交通／3 中世日本と琉球間の交通／4 域内舟運／5 事例特記、Ⅳ 沖縄文化形成における交通の役割、Ⅴ 結語、付録－沖縄地域総合交通年表、交通搬具図絵等

6 おわりに

今回は沖縄交地域通歴史の5時代区分のうち古琉球時代に焦点をあて考察した。しかしながらこの時代を取り巻くより広い背景に視点－東アジア、大航海時代の世界、中世日本－をおいた考察を一層深めることが必要であり

今後の課題である。なお 本研究は次年度まで継続の予定（科研助成）であり、残された近世以後の考察を進めることにしている。

参考文献

- 1) 上間清：沖縄地域総合交通史研究－基礎事項及びイメージについて－、第13回土木計画学研究講演集、p. p. 97-、1990
- 2) 歴代宝案 第一集、那覇市史資料編第一巻4、那覇市役所、1986

その他 本文図－2 提示文献等多くの文献を参考としたが、ここでは掲載を割愛したい。